

大阪では13年ぶりの大規模な個展！ 江戸っ子アートの ラスボス

国芳

江戸末期の浮世絵師、歌川国芳(1797-1861)は、無尽の想像力と圧倒的な画力によって、斬新な作品を数多く世に生み出しました。その奇想天外なアイデア、現代にも通ずるデザイン力やユーモアは、浮世絵という枠や時代を超えて多くの人々を魅了し、国内外で高い人気を誇ります。

30歳代始めに「水滸伝」の英雄たちを描き、遅咲きの成功を手にした国芳は、美人画と役者絵を頂点とする当時の浮世絵界で、武者絵を新たに人気ジャンルへと押し上げました。3枚続きの大画面に大胆に描かれた武者絵[※]、ユーモアや機知に富んだ戯画、西洋画法を取り入れた風景画など、様々に趣向を凝らして新風を吹き込み、豊国(三代)、広重と並ぶ人気絵師となった国芳。その偉業は、近代・現代にも引き継がれています。

本展は国芳展の決定版として、武者絵や戯画をはじめとした幅広い画題の浮世絵版画や貴重な肉筆画など、約400点を展示し、国芳の魅力を存分に伝えます。

※武者絵…歴史・伝説・軍事物などに登場する武将たちやその合戦の場面を描いた絵。



《坂田権蔵丸》天保7年(1836)頃

イケメン、ダークヒーロー、 巨漢に怪童

——「武者絵の国芳」による
魅惑のヒーロー大集合！

3枚続きの大画面を活かしたダイナミックな構図、物語の決定的瞬間をつかむ描写力など、武者絵は国芳の手で大きく進化。その魅力は、現代の漫画やアニメにも通じます。出世作の「通俗水滸伝豪傑百八人之一個(吉人)」から、最晩年の6枚続きの大作《四条縄手の戦い》(前期のみ)まで、国芳の代名詞である武者絵の数々が一堂に並びます。



《相馬の古内裏》(部分)弘化2-3年(1845-46)頃

3枚続きの大画面



《日本歌右門権蔵古事》弘化4年(1847)

猫を描いた 新発見作品も！

——愛猫家・国芳のアイデアと
観察眼に注目！

国芳は犬の猫好きで、絵を描く時にも懷中で仔猫をかわいがったと言えられるほどでした。国芳の猫たちは、戯画、役者絵、美人画などジャンルの枠を超えて登場し、人気役者に扮したり、遊郭の客になったりと、人間顔負けの活躍ぶりです。本展では、猫を描いた新発見作品《流行猫の変化》(通期)も展示します。

令和の大阪に、
いざ現る！



《流行猫の変化》天保12-13年(1841-42)頃

《蘭館シリーズ 猫と遊ぶ猫》(部分)弘化2年(1845)頃

お江戸を沸かせた“笑い”の力

——機知に富んだ戯画の数々に、幕府の禁令も何のその

笑いを誘い、時に風刺を潜ませた戯画も、国芳の得意なジャンルの一つ。猫、金魚、鳥、さらには道具や玩具をも擬人化させたり、絵に二重の意味を持たせたり、言葉遊びを織り込んだりと、手を替え品を替え、多くの戯画を描きました。天保13年(1842)に、江戸幕府によって役者や遊女を描くことが禁止された際にも、戯画による笑い風刺で苦境を乗り切ります。



《きん魚づくし ぼんげん》天保13年(1842)頃

どんな画題も
お手のもの



《あかけハニハあがとんだい人だ》(部分)弘化4年(1847)頃 ※すべて個人蔵